

解析力学B

第08回

神戸大 システム情報学研究科 計算科学専攻：陰山 聡

この講義のウェブページ: URL: <http://tinyurl.com/kageyama2011>

2011.12.08

Table of Contents

連絡

前回の復習

汎関数

変分法

変分原理(ハミルトンの原理)

次週

- ▶ 来週休講(出張のため)
- ▶ 次回は12/22
- ▶ 定期試験は2/9

自由度が N の系 (系の状態が N 個の座標 (q_1, q_2, \dots, q_N) で指定される)

ラグランジアン

$$L(q_1, q_2, \dots, q_N, \dot{q}_1, \dot{q}_2, \dots, \dot{q}_N)$$

ラグランジュの運動方程式

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}_i} \right) - \frac{\partial L}{\partial q_i} = 0 \quad (i = 1, 2, \dots, N)$$

汎関数

関数 $f(x)$: 数 $x \rightarrow$ 数 $f(x)$ 【図: 入力 \rightarrow ブラックボックス \rightarrow 出力】

汎関数: 関数 $f(x) \rightarrow$ 数 $F[f]$ 【図】

例1

曲線 $y = y(x)$ ($0 \leq x \leq a$) を x 軸のまわりに回転してできる曲面の面積 $S[y]$

【図】

$$\begin{aligned}\Delta S &= 2\pi y \times \sqrt{\Delta x^2 + \Delta y^2} \\ &= 2\pi y \times \sqrt{1 + \left(\frac{dy}{dx}\right)^2} \Delta x \\ &= 2\pi y \times \sqrt{1 + (y')^2} \Delta x\end{aligned}$$

従って

$$S = 2\pi \int_0^a y(x) \sqrt{1 + (y'(x))^2} dx$$

【クイズ】 $S[y]$ を極小にする関数形 $y(x)$ 何だろうか？ ただし $y(0)$ と $y(a)$ は固定。(極小曲面)

例2

重力の下、坂道 $y(x)$ を滑る質点が滑り落ちるのにかかる時間 $T[y]$ 。

【図: x 軸右向き、 y 軸下向き。左上端原点 O 、右下端 A 】

運動エネルギー $(\frac{m}{2}v^2)$ + ポテンシャル $(-mgy)$ = 一定 = 0

(ただし、時刻 $t = 0$ で質点は停止とする。)

$$\frac{m}{2}v^2 - mgy = 0$$

$$v = \sqrt{2gy}$$

微小な距離 Δs を通過するのにかかる微小時間 Δt 【図】

$$\begin{aligned}\Delta t &= \frac{\Delta s}{v} \\ &= \frac{\Delta s}{\sqrt{2gy}} \\ &= \frac{\sqrt{\Delta x^2 + \Delta y^2}}{\sqrt{2gy}} \\ &= \frac{\sqrt{1 + \left(\frac{dy}{dx}\right)^2} \Delta x}{\sqrt{2gy}} \\ &= \frac{\sqrt{1 + (y')^2}}{\sqrt{2gy}} \Delta x\end{aligned}$$

$$T[y] = \frac{1}{\sqrt{2g}} \int_0^a \frac{1}{\sqrt{y}} \sqrt{1 + (y')^2} dx$$

$T[y]$ を極小にする関数形 $y(x)$ を最速降下線と言う。ただし、 $y(0)$ と $y(a)$ は固定。

【クイズ:最速降下線を推測せよ。】

例3

重力の下、ヒモをぶら下げる。【図：二つの鉄塔の間の電線。右x軸。上y軸】

ヒモの長さ $l[y]$

$$\begin{aligned}l[y] &= \int ds \\ &= \int \sqrt{dx^2 + dy^2} \\ &= \int_0^a \sqrt{1 + \left(\frac{dy}{dx}\right)^2} dx \\ &= \int_0^a \sqrt{1 + (y')^2} dx\end{aligned}$$

ヒモの質量密度を ρ とする。微少な長さ Δs のヒモの質量 $\rho\Delta s$ 。ヒモ全体のポテンシャルエネルギー $E[y]$

$$E[y] = \int \rho g y ds = \int_0^a \rho g y \sqrt{1 + (y')^2} dx$$

ヒモをぶら下げると(平衡状態になると)、長さ l を一定に保ちつつ、 $E[y]$ を最小にする関数形 $y(x)$ をとる。その時汎関数

$$I[y] = \int_0^a (\rho g y - \lambda) \sqrt{1 + (y')^2} dx$$

が最小となる。 λ は定数(ラグランジュの未定乗数法)。これをカタナリー(懸垂曲線)という。

【クイズ: 懸垂曲線を推測せよ。】

変分法

これまで挙げた例は全て、次のような「汎関数の極値」を求める問題であった。

定数倍は無関係なので、除くと、

$$\text{極小曲面: } S[y] = \int_0^a y \sqrt{1 + y'^2} dx$$

$$\text{最速降下線: } T[y] = \int_0^a \frac{\sqrt{1+y'^2}}{\sqrt{y}} dx$$

$$\text{懸垂曲線: } I[y] = \int_0^a (\rho g y - \lambda) \sqrt{1 + y'^2} dx$$

変分法

関数 $y(x)$ が極値をとる x の値を求める方法: 微分法

汎関数 $I[y]$ が極値をとる $y(x)$ を求める方法: 変分法

微分

テーラー展開。

$$y(x_0 + \epsilon) = y(x_0) + y'(x_0)\epsilon + O(\epsilon^2)$$

$$\Delta y = y(x_0 + \epsilon) - y(x_0) = y'(x_0)\epsilon + O(\epsilon^2)$$

関数 $y(x)$ が x_0 で極値 $\rightarrow x_0$ で微分 y' がゼロ

変分

汎関数 $I[y]$ が関数 $y_0(x)$ で極値をとる \rightarrow 関数 $y_0(x)$ を少しだけ変化させても汎関数 I の値は変わらない。

$$I[y_0(x) + \epsilon\eta(x)] - I[y_0(x)] = \epsilon\delta I + O(\epsilon^2)$$

δI を変分という。

汎関数 $I[y]$ が $y_0(x)$ で極値をとる $\rightarrow y_0(x)$ で変分 δI がゼロ。

【図】

ϵ は小さい数。 $\eta(x)$ は任意の関数。ただし、端点条件

$$\eta(a) = \eta(b) = 0$$

を満たす。

$$I[y] = \int_a^b L(y(x), y'(x), x) dx$$

のとき、 $y(x)$ を

$$y(x) \rightarrow y(x) + \epsilon \eta(x)$$

と変えたときの汎関数 I

$$I[y(x) + \epsilon \eta(x)] = \int_a^b L(y(x) + \epsilon \eta(x), y'(x) + \epsilon \eta'(x), x) dx$$

被積分関数をテーラー展開する。

$$L(y + \epsilon \eta, y' + \epsilon \eta', x) = L(y, y', x) + \frac{\partial L}{\partial y} \epsilon \eta(x) + \frac{\partial L}{\partial y'} \epsilon \eta'(x) + O(\epsilon^2)$$

$$\begin{aligned} I[y + \epsilon\eta] &= \int_a^b L(y, y', x) dx + \epsilon \int_a^b \left(\eta(x) \frac{\partial L}{\partial y} + \eta'(x) \frac{\partial L}{\partial y'} \right) + O(\epsilon^2) \\ &= I[y] + \epsilon \delta I[y] + O(\epsilon^2) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}\delta I &= \delta \int_a^b L(y, y', x) dx \\ &= \int_a^b \left(\eta(x) \frac{\partial L}{\partial y} + \eta'(x) \frac{\partial L}{\partial y'} \right) dx\end{aligned}$$

$$\int_a^b \eta'(x) \left(\frac{\partial L}{\partial y'} \right) dx = \left[\eta(x) \left(\frac{\partial L}{\partial y'} \right) \right]_a^b - \int_a^b \eta(x) \frac{d}{dx} \left(\frac{\partial L}{\partial y'} \right) dx$$

端点条件 $\eta(a) = \eta(b) = 0$ より、右辺第一項はゼロ。

従って

$$\delta I = \delta \int_a^b L(y, y', x) dx = \int_a^b \left\{ -\frac{d}{dx} \left(\frac{\partial L}{\partial y'} \right) + \frac{\partial L}{\partial y} \right\} \eta(x) dx$$

任意の $\eta(x)$ に対して変分 $\delta I = 0$ なら、

$$\frac{d}{dx} \left(\frac{\partial L}{\partial y'} \right) - \frac{\partial L}{\partial y} = 0$$

が成り立つ。これを オイラー=ラグランジュの方程式という。

$y(a)$ と $y(b)$ が固定という端点条件の下、汎関数 $I[y] = \int_a^b L(y, y', x)dx$ が極値をとる関数 $y(x)$ は、オイラーラグランジュの方程式を満たす。

関数が N 個、 $y_i(x)$ ($i = 1, \dots, N$)あるとき: 関数 $y_i(a)$ と $y_i(b)$ が固定という端点条件の下、汎関数 $I[y_1, y_2, \dots, y_N] = \int_a^b L(y_1, y_2, \dots, y_N, y'_1, y'_2, \dots, y'_N, x) dx$ が極値をとる関数 $y_i(x)$ は、オイラーラグランジュの方程式を満たす。

$$\frac{d}{dx} \left(\frac{\partial L}{\partial y'_i} \right) - \frac{\partial L}{\partial y_i} = 0 \quad (i = 1, \dots, N)$$

変分原理(ハミルトンの原理)

N 次元運動を考える。時間 t 、座標 q_i 、ラグランジアン $L(q_1, \dots, q_N, \dot{q}_1, \dots, \dot{q}_N, t)$ のとき、

作用 S を

$$S = \int_{t_a}^{t_b} L(q_1, \dots, q_N, \dot{q}_1, \dots, \dot{q}_N, t) dt$$

と定義すると、運動 $q_i(t)$ は、作用が極値をとるように実現される。

これを変分原理(ハミルトンの原理)と言う。

ハミルトンの原理が成り立つなら、変分法により、 $q_i(t)$ はオイラー=ラグランジュの運動の方程式を満たす。つまり、

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}_i} \right) - \frac{\partial L}{\partial q_i} = 0 \quad (i = 1, \dots, N)$$

これはラグランジュの運動方程式に他ならない！